安康記の大長谷王像

長野一雄

一

安康記は目弱王の乱と市辺之忍歯王暗殺の二話からなる。二話はきわめて残酷で血なまぐさい。研究者は心ひかれ、戸惑いを感じるのではないか。なぜに『記』は、こうまで醜悪な王家の争いを記すのか。われわれが崇高に美化された天皇家像の中で生きているため、一瞬目を疑いたくなる感覚に襲われるからだが、だとすると、現代感覚が作品を見えなくしていることのよく分かる例である。

とにかく、研究者は二話に目を向ける。結果、二話は多く別個に追究されることになり、統合的に考察されることが少ない。が、果してそれだけでよいのか。残酷な二話を続けて安康記を形成していること自体、すでに『記』編者の強い意図がほの見えているのではないか。私見によると、確かに二話によって『記』は何かを語りかけようとしているのである。二話を統合させた安康記そのものを考える必要があろう。

事を、安康記紀の相違を確認することから始めたいが、周知の点も多いので簡略な指摘にしておきたい。

安康紀の記述は、その記事や説話がほぼ安康天皇を中心に展開していると思う反正天皇の皇女等に、強暴さを恐れて逃げられる記事があるが、前者は、穴穂皇子が軽太子を討って自尽させるので、安康天皇に主体のある記事であり、後者は、大草香皇子の妹を大泊瀬皇子にめあわせようとする安康天皇の次の行動へつなげる導入部の感がある。他は安康天皇が大草香皇子を討つ説話、大草香皇子の妻を后とする記事、大草香皇子の妹を大泊瀬の妃とする記事、眉弱王に殺される記事、それに皇統譜や即位や陵墓の記事で、すべて安康天皇が主体者である。

これに対して安康記は、極端ともいえる違例の様相を呈している。事件にかかわる人物が多彩に登場するが、それらの人物が大長谷王を端緒とし軸として悲劇的最期を遂げ、事件が連鎖反応的に展開する。安康記の前段は、安康天皇が大日下王を討ち、逆に大日下王の子の目弱王に殺される事件を記すが、その発火点は、安康天皇が大長谷王の妃を大日下王からめとろうとしたことにある。安康天皇が暗殺されると大長谷王は即座に立ち上り、優柔不断な黒日子王

・白日子王の二兄を殺した上で、目弱王とそのパトロンの葛城都夫良意富美を討ち倒し、余勢をかるかのように市辺之忍歯王を暗殺してしまう。倒された人物は大長谷王にとって王権のライバルである。目弱王の乱と目される中段と、市辺之忍歯王暗殺の後段とは、大長谷王が主導権を握る存在である。中西進は「安康記の内容は、いわば雄略即位前記」というが、[1]そうとしかいいようがないほど、大長谷王の存在は大きい。安康記はすさまじいばかりに血塗られた王家の話であり、血を誘う不気味な存在は、まさに大長谷王そのものである。

安康記が安康紀と比べて、ほぼ雄略即位前記であり、大長谷王の惹起する事件を記していることは、そこに『記』の強烈な意図があるものと察知できる。

次に安康記が描く大長谷王の筆に、他の人物とは違う微妙な違いのあることを確認したいが、おおよそは周知のことなので、これも簡潔に記しておきたい。

まず安康天皇（一）、都夫良意富美（二・三・四）、市辺之忍歯王（五）の描き方を示してみる。

一、天皇大怒、殺二大日下王一而。
二、爾都夫良意美、聞二此詔命一、自参出、解二所レ佩兵一而、八度拝白者。
三、如レ此白而、亦取二其兵一、還入以戦。爾力窮矢尽、白二其王子一。
四、故、以レ刀刺二殺其王子一、乃切二己頸一以死也。
五、忍歯王、以二平心一。（傍点筆者、以下同）

一は「大」がやや心理を強調するが、特に意をこめた表現と思えず、一般的である。

二は「八度拝白者」[2]に、都夫良意富美よりも逆に大長谷王を高くあがめる心理をみせる。

三の「力窮矢尽」や、四全体には都夫良意富美の壮烈さが浮き彫りされている。とりあげなかった会話の部分を含め、いさぎよさや仁侠の精神[3]が強く感じられるようだ。

五は「平心」に深長な意味があるが、これも逆に大長谷王の激情性を浮き立たせる機能がある。

大長谷王の場合は次のようである。

一、即聞二此事一以慷慨忿怒。（安康天皇暗殺直後）
二、大長谷王、詈二其兄一言。
三、即握二其衿一控出、抜レ刀打殺。
四、到二小治田一、掘レ穴而随レ立埋者、至二埋レ腰時一、両目走抜而死。（二・三・四は黒日子・白日子二兄に対した場面）
五、即衣中服レ甲、取二佩弓矢一、乗レ馬出行、倏忽之間、自レ馬往雙、抜レ矢射二落其忍歯王一、乃亦切二其身一、入レ於二馬槽一、与レ土等埋。（市辺之忍歯王暗殺の場。以上に限り用字確認のため漢字体で記した）

一は、「即」にすぐ鋭敏に反応する感性がみられ、「慷慨忿怒」に、かっと燃える激情性がみられる。

二・三・四は、とにかく激情的で、その激情に衝き動かされると、並はずれた腕っぷしの強さや、非情な残忍性を発揮する大長谷王像を描いているようにみられる。

五は、「衣中服レ甲」とことわるところに、ただ気がはやるだけでない、用意周到さ慎重さがある。そう思ってみると、一から四の一連の行動には、ライバルを倒す計算があるとみられる。「倏忽之間」から「射落」までの表現には、機先を制したすばやい行動性がみら

れ、「切二其身一」以下の表現には、自己の王権を主張し、相手の王権を抹消しようとする、強い意欲の持主のように描かれた意図がある。この部分、たとえ土と等しく埋め隠しても周りの者が知っているのだから、王族である市辺之忍歯王の尊厳性を踏みにじる行動とみたい。

以上をふりかえると、荒々しく野性的で、ものにとりつかれて自分で止めようのない激しさや、すばやさ、剛胆さ、強力さ、意外な周到さが、大長谷王にみられる。都夫良意富美の場合も荒々しく勇ましいが、助けを求めた目弱王に対し、意気に感じて行動し、自己を律して最期を飾っているようで、ものにとりつかれたような激情とは一味違う悲壮美がある。

二

次に視点を変え、安康記紀や雄略前紀を比較対照して、話の形象に微妙な差のあることに注意し、それによって大長谷王を描く安康記の注目すべき特色を浮き彫りしてみたい。『記』『紀』に表現差のあることは自明であるから、逐一細部の表現に注視せず、大長谷王像を把握する上で、もっとも核と判断する描き方を重視してみる。

まず前半の目弱王の乱で、目弱王が安康天皇を殺す場面に注意すると、『記』では、

殿の下に遊べる目弱王、この言を聞き取りて、すなはち、「竊伺二天皇之御寝一」て、その傍の大刀を取るすなはち、その天皇の頸を打ち斬りて、都夫良意富美の家に逃げ入りき。（考察の都合上一部に漢字体を併用した）

とあるが、「竊伺二天皇之御寝一」という表現からすると、他人に察知されないよう秘密裡に行動しているようで、この場には母后もいないような、その存在を隠した表現をしている。そしていきなり都夫良意富美の家へ逃げたとある。そこへ逃げるということは、都夫良意富美を知っていたからであり、いざというときは助けをそこに求めるような手はずになっていたか、もっとも頼れる人物であったか、である。とにかく、目弱王は都夫良意富美と縁をもっていたことになるが、『記』の系譜では不明である。ところが雄略即位前紀三年八月条の細注に、去来穂別天皇の娘とある長田皇女（中蒂姫皇女）が、大草香皇子と結婚して眉輪王を生んだ記事がある。それを重視し、履中紀元年七月条の葦田宿禰の娘黒媛が履中天皇の皇妃となって生んだ中磯皇女を中蒂皇女と同一人物と見立てた場合、眉輪王の祖母は葛城氏だったことになり、縁のありかがわかるが、これら資料の関連を『記』に当てはめて信用しきるわけにいかない。そこで、なんらかの関係で保護を求めたとする以外にないが、とにかくこの記述では、葛城氏が背後で目弱王をあやつり、安康天皇を倒す陰謀をもっていたと考えるわけにいかない。もし陰謀があったとするなら、もう少し筆があってもよさそうである。つまり、母親の存在を見せない記述といい、この都夫良意富美の記述といい、『記』は、安康天皇を暗殺する陰謀があったとしたくない意図をもつように思われる。

これに対して『紀』は、陰謀があったことを示す立場をとっているようにみえる。

すでにして穴穂天皇、皇后の膝に枕したまひて、昼酔ひて眠臥したまへり。是に眉輪王、その熟睡ませるを伺ひて、刺し殺せまつりつ。

とあり、母親は知っていたことになる。けっきょく母親も共謀者となり陰謀の匂いが強い。

次に、大長谷王が黒日子王・白日子王を殺す場面である。

「人、天皇を取りつ。いかにかせむ」

しかるに、その黒日子王、驚かずて怠緩かにある心あり。ここに、大長谷の王、その兄を詈りて言ひしく、「一つには天皇にいまし、一つには兄弟にいますを、何か恃む心もなく、その兄を殺しまつりしことを聞きて、驚かずて怠かにある」といひてすなはち、その衿を握りて控き出でて、刀を抜きて打ち殺したまひき。

右の『記』の表現では、「人、天皇を取りつ。いかにせむ」と、兄の黒日子王にどうすべきか弟として対処の仕方を尋ねたのに、気にもとめないような、実の兄弟として情のない、いいかげんな態度なので、かっとなった大長谷王が、直情径行的に殺人の暴行に及んだという記述である。兄二人が同じ態度で、およそ復讐心などまったくもっていないような、かといってどうしていいかも分からないような、間抜けた無能ぶりに描かれているのではないか。二兄に陰謀があるからとぼけたととることは、この表現では無理であろう。もし陰謀があってとぼけたのなら、それを示すような微妙な素振りなりちょっとした発言なりがないと、享受者には分からない。劇の場合なら、セリフがなくても演者は所作で示せようが、文字に表現するなら、それがないと、二兄に陰謀があったととるのは無理である。したがって私見では、二兄の愚かさ、無能ぶり、ピントはずれな情のなさを、大長谷王と対比させて描き出していると理解したい。あくまで激情的で、行動力のある大長谷王像をクローズアップさせる形象の仕方である。

これに対して『紀』は、明らかに違っている。先記した陰謀のあったことを示すような、微妙な素振りを示す表現があるのである。

天皇、大きに驚きたまひて、即ち兄等を猜ひたまひて、甲を被り刀を帯きて、兵を率て自ら将となり、八釣白彦皇子を逼め問ひたまふ。皇子、其の害らむとすることを見て、嘿坐しまして語はず。天皇、乃ち刀を抜きて斬りたまひつ。

とある。「兄等を猜ひ」と、雄略天皇が最初から兄達の陰謀を疑っている表現がはっきりある。また「嘿坐」は、大漢和辞典によると「嘿」は黙に通じ、だまる・口をつぐむ、に相当し、「坐」は、すわる・ゐる、に相当しそうである。口をとざし、じっと黙り通している状況が浮んでくる。この状況は、裏があることを知られまいとし、黙り通そうとする態度から出ている。その後、

眉輪王の曰さく、「臣、元より、天位を求ぐにあらず。唯父の仇を報ゆらくのみ」とまうす。坂合黒彦皇子、深く疑はるることを恐りて、竊に眉輪王に語る、遂に共に間を得て、出でて円大臣の宅に逃げ入る。

とあり、眉輪王は皇位をえたいための陰謀ではなく、復讐のためだと弁解するが、黒日子王は疑われることを恐れて、眉輪王とともに円大臣の家へ逃げたと記す。この表現は、追求されるとごまかせないと察知しての行動を示している。けっきょく『紀』は、安康天皇の皇后・眉輪王・白彦皇子・黒彦皇子・円大臣が結託しての陰謀であることを、微妙な表現で示しているのだと読みとりたい。特に注意しておきたいのは、雄略天皇が最初から陰謀だと二兄を疑って行動していることで、このため『紀』の方は『記』のような激情性よ

りも、相手を疑い問い詰めようとする姿勢がみられ、二兄はその追求から逃れられないとおののいているのである。剛胆さばかりでなく、理詰めでいく智略のまさる点も感じられる雄略像である。そしてこの点は、市辺之忍歯王暗殺の場面でも一貫して同一である。

この場面『記』は、市辺之忍歯王が「平心」をもって狩猟に臨んだことを示し、大長谷王の侍臣が、

いまだ寤めまさぬか。早く白すべし。夜はすでに曙けぬ。猶庭に幸すべし。

と、先に忍歯王がさそいかけたことを疑い、大長谷王に、

うたて物云ふ王子ぞ。かれ、慎しみたまふべし。また、御身を堅めたまふべし。

と警戒するように進言したのを聞くや、大長谷王は衣の中に甲を着けて、機先を制していっきに忍歯王を射殺すことになっている。ちゅうちょなく行動するすばやさは、並のものでない。この場合も陰謀を表に出す記述がなく、大長谷王は部下の注意に促されて先手をうっただけである。(4) これに対して『紀』は明らかに違っている。

天皇、穴穂天皇の、曽、市辺押盤皇子を以て、国を伝へて遙に後事を付に嘱けむと欲しを恨みて、乃ち人を市辺押盤皇子のもとに使りて、陽りて校猟せむと期りて。

と冒頭にあり、狩に出たとき、

大泊瀬天皇、弓を彎ひ馬を馳せて、陽り呼ひして、「猪有り」と曰ひて、即ち市辺押盤皇子を射殺したまふ。

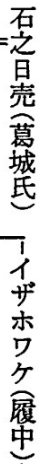
とあって、最初から相手を王権のライバルとして倒す積りでだまし討っているのである。王権争いの陰謀を策しているのは雄略天皇であり、忍歯王は被害者となる。

こうして、『記』の描き出す大長谷王像は『紀』と違い、手のつけられないほど激情的で、一気果敢な行動力をもち、事をなす実行力が抜群である。

三

大局的に安康記を見直してみたい。その際王権の由来を系譜によっても語りかけている『記』の性格を、無視しないで考えたい。

ここにみられるのは、仁徳系皇統の王族の争いである。『記』の系譜は次のようになる。



安康記の発端は、安康天皇が王権を強固にするため、祖父仁徳天皇の子でおじに当る大日下王を、服属させようとしたことに始まっている。大日下王は皇位継承の資格をもつが、母が高貴ではないので、安康天皇に対して控えめなのは当然である。この服属をねらった結婚政策は、根臣という私利に走った愚かな家臣により血を呼ぶ結果となり、王権のライバル大日下王は消されるが、安康天皇自身もその子目弱王に殺される。その機に立ち上ったのが大長谷王である。

大長谷王は、兄安康天皇への復讐という大義名分で、王権のライ

バル目弱王を倒すが、その際まず、身内の王権のライバルである二人の兄を倒している。そしてその上で、目弱王と縁のあるらしい葛城都夫良意富美をも滅ぼしてしまう。王権の外戚として、王権に強い圧力をもっていた葛城氏が消されたことになる。残った王権のライバルは、履中天皇の子市辺之忍歯王だけで、『記』は続いてこれを暗殺する話を記しているのである。忍歯王の母は、葛城曽都比古の子葦田宿禰の娘黒比売と履中記は記すから、政権にくいこんでいる葛城氏は、二重に息の根をとめられたことになる。大長谷王は、こうして王権のライバルを全員根こそぎに倒し、強力な背後の豪族をも滅ぼしてしまう。これが安康記である。

仁徳系皇統の王権争いは、安康記に始まったわけではない。仁徳天皇は異母弟速総別王を反逆のかどで倒しているし、履中天皇は王権を奪おうとした実弟墨江中津王を倒している。反正天皇時代は系譜しかないが、次の允恭天皇の崩後、長兄の軽太子と同母弟の穴穂皇子の間に王権争いがあり、穴穂皇子が軽太子を倒して安康天皇となっている。仁徳から安康へ、反正を除く各王朝にかならず王権争いがあり、仁徳系皇統は血塗られた王家であった。中でも安康は実兄の軽太子を倒し、おじの大日下王を倒しで、二度までも王権のライバルを殺したことになるが、次の雄略はそれを上回り、いとこの目弱王と市辺之忍歯王、実兄の黒日子王と白日子王の計四人を殺していて、まさにすさまじい。

下巻の始まる仁徳王朝以後は、人の世の天皇の時代といわれる[5]が、中巻が王権の版図拡大を記してきたのに対し、人の世は王権内部の争いがくり返し記されてきたのである。そして安康記の大長谷王は、仁徳から安康に至るどの天皇よりも、量的にまさる王権ライバルのまっ殺を、その激情性と剛胆と智略によって遂行し、ここで皇族内部の血塗られた王権争いは終止符をうたれることになる。以後清寧記に王権の争いはなく、顕宗・仁賢天皇は争いどころか皇位を譲り合い、弟の袁祁王が先に位をついでいるのである。雄略天皇は、仁徳系皇統内のあいつぐ王権争いをその力によって終息させ、皇位についた天皇となるわけで、『記』はそのことを、『紀』とは違う独特な大長谷王像を形象することによって記しているのである。

四

雄略天皇は、『紀』や中国・朝鮮の史書や考古学上から、古代史上強い政治力のあった天皇として、歴史家に重視され、文学者からもその天皇像が特に注目されてきた。安康記や雄略記紀もさることながら、『万葉集』巻頭歌や『霊異記』巻頭話が目をひくからでもある。それらの作品群からみても、他の天皇とは違う抜き出たカリスマ性やスター性をもつ存在とみて間違いなかろう。中村啓信が「天皇中の天皇と映っていた」とし、『紀』にみられる雄略像から、「強暴もまた天皇の最高の資質の現われ、ともいうべき受け容れ方が、ある程度一方では出来上っていたとみてもいいのではないか」とする指摘[6]に納得するし、菅野雅雄が「天武とその周辺には、始祖としての雄略像とその神性とが強く印象づけられていたのであろう」[7]と「神性」をもつ天皇と理解することにも納得するのだが、私はこれらの指摘にいま一歩漠然とした把握だという弱さを感じるのである。安康記の描き方をみていると、もっと古代にせまるとらえ方ができるのではないか。

中西進は、安康記の黒日子王・白日子王に対する雄略像が、倭建

命に似ていると指摘している。[8] その景行記の表現は、

「朝署に厠に入りし時に、待ち捕らへ搤批(つか)みて、その枝を引き闕きて、薦に裹みて投げ棄てつ」

ここに、天皇その御子の建く荒き情を惶みて詔らししく。

とある。これに対して大長谷王が白日子王を殺す場面は、

すなはち、その衿を握りて引き率来て、小治田に到りて、穴を堀りて立てながら埋みしかば、腰を埋む時に到りて、両つの目走り抜けて死にき。

とあり、表現は違っているが、相手を幼児扱いするような強力ぶりや、野性的な強暴さは相似である。

このような瞬発的に並はずれた激しい力を発揮する行動は、いかにも神がかっているが、それが神の依りついた行動であることを示す表現があるので、見逃すべきでないと考える。すなわち倭建命物語で、景行天皇がその行動を聞いていわれた「御子の建く荒き情を惶みて」の「惶」である。大漢和辞典は〈おそれる〉をあげるが、[9] 〈かしこむ〉をもあげる辞典もある。これと相似の表現に〈畏〉があり、大漢和辞典は同じく〈おそれる〉〈かしこむ〉をあげ、熟語として〈惶畏〉をもあげる。〈おそれる〉は動詞で、形容詞に〈おそろし〉がある。時代別国語大辞典上代篇は〈恐・懼・畏〉の意味に〈恐れる・つつしみはばかる・こわがる〉をあげるが、この〈おそれる・おそろし〉〈かしこむ・かしこし〉は、日本のより古い時代にあっては、異境から依りつく神を畏怖する表現だったのではないか。『記』中の全例を今ここにあげておれないが、伊邪那岐命の黄泉訪問の場に、

悔しきかも、速く来ますずて。あは黄泉つ戸喫しつ。しかれども、愛しきあがなせの命、入り来ませる事恐し。

とあり、須佐之男命が高天の原から出雲の肥の河上に来た場に、

速須佐之男の命、その老夫に詔らししく、「このなが女は、あに奉らむや」答へ白ししく、「恐し。また御名を覚らず」

とあり、高天の原から葦原中国に派遣された建御雷神に、八重事代主神が服従することを父の大国主神に告げる場に、

その父の大神に語りて曰ひしく、「恐し。この国は天つ神の御子に立て奉らむ」

とある。すべて異境から来た神の行動や発言を畏怖しての言葉である。同じ高天の原内でも、より尊い位置から来臨した神に使われる例もある。天照大神が葦原中国への派遣者をきめる場に、

かれしかして、天の迦久の神を使はして、天の尾羽張の神に問ひたまひし時に、答へ白ししく、「恐し。仕へまつらむ。しかれども、この道には、あが子建御雷の神を遣はすべし」

この場合は、来臨した天迦久神を通して、かなたの尊い存在天照大神を畏怖しての表現であろう。これらと似て、巫女が神がかりしたとき神下って言を告げる神に対して使われる例が、仲哀記にある。[11]

この来臨する神に対して使われる表現が、天皇に使われるようになる。応神天皇が矢河枝比売に求婚したとき、その父親が、

こは天皇に坐すなり。恐し。あが子、仕へまつれ。

と来臨した天皇の求婚を畏怖していっているし、安康天皇が弟大長谷王の后にと、大日下王の妹を要請したとき、大日下王は、

もし、かかる大命もあらむかと疑へり。かれ、外に出でずて置きつ。これ恐し。大命のまにまに奉進らむ。

と、天皇の申し出を畏怖している。

こうした用例からすると、先記した小碓命の行動を畏怖する景行天皇の言葉は、小碓命を異境から来た神霊の依りつく存在、とみるところから生まれた表現ではなかろうか。この小碓命のと似た例に、履仲記で天皇の弟水歯別命が隼人の曽婆訶理に墨江中王を殺させたとき、隼人を畏怖して「惶」を用いているのがある。(11) これは隼人を異境から来た神霊の依りつく存在、とみての言葉であろう。

だからこそこうした表現は、天皇の行動に対して『記』中でむやみに使われることがなく、ごく限定して使われている。すなわち、先例の応神天皇と安康天皇に対してであり、他は当面している雄略天皇に対してで、二例みられる。(雄略記にはもう二例あるが、それは神に対してである)(12) 一は志幾大県主が不遜だとして家を焼いたときで、

奴にしあれば、奴ながらに覚らずして、過ち作れるは、いと畏し。かれ、のみの御幣の物を献らむ。

とあり、志幾大県主が雄略天皇を畏怖してのものである。二は若日下部王に求婚したときで、

日を背にして幸行しし事、いと恐し。かれ、おのれ、直に参上りて仕へまつらむ。

と、天皇の行動を畏怖して使っている。これらの例から、雄略天皇は倭建命の場合と同じように、異境からきた神霊の依りつく存在とみられていたのではなかろうか。あるいは、七世紀後半から八世紀の朝廷は、天皇を現人神とみる理念をもっていたから、雄略天皇は他の天皇と比べて、より強力な神霊の依りついている存在とみられていたのではなかろうか。

雄略天皇が、異境からきた強力な神霊の依りつく存在とみられていたことは、『記』のみの理解ではなく、七・八世紀の朝廷全体の理解であったらしく、雄略紀の冒頭に、

天皇、産れまして、神しき光、殿の中に満めり。長りて伉健しきこと、人に過ぎたまへり。

とある表現(13)によって分かる。光が神のものなる存在を示すことは、『竹取物語』のかぐや姫の例がすぐ浮かぶが、神代紀一書で、大己貴神が共に国を治める神を求めていたとき大三輪之神が出現し、「神しき光海に照して忽然に浮び来る」とある。同一書で、豊玉姫が出産のため陸地へ来るとき、「女弟玉依姫を将ゐて、海を光して来到る」とある。神武記吉野巡行で、国つ神井氷鹿は井より出でて天皇を迎えるが、そのとき「井に光あり」と記される。『出雲風土記』嶋根郡加賀郷条に、支佐加比売命が岩屋が暗いので金弓を射ると「光加加明く」とあり、神霊の感応をいう光である。『肥前風土記』基肄郡長岡神社条に、景行天皇が酒殿の泉の辺りで食事されたとき「甲鎧」が「光明常に異」なるので、占問わせると、この地の神が「甚く御鎧を願」うからだとあり、これも神霊の感応であろう。(14) これらの例から、光が異境からくる神、異境にある神の霊を示していることが確認できる。

雄略天皇が神霊の強力に依りつく存在とみられていた別例がある。大長谷王として都夫良意富美を攻めたときの表現、

ここに、大長谷王、矛もちて杖にしてその内を臨みて詔らししく。

で、矛を杖にして立つ表現は『風土記』によくあるもので、依りつく神霊の力で国土を占有支配しようとしての行動である。『出雲風土記』意宇郡意宇条に、

「今は国は引き訖へつ」と詔りたまひて、意宇の社に御杖衝き立てて、「おゑ」と詔りたまひき。

とあり、『播磨風土記』宍禾郡御方の里条に、

一ひといへらく、大神、形見として、御杖をこの村に植てたまひき。故、御形といふ。

とあり、仲哀記の神功皇后の新羅征討で、

その御杖もちて、新羅の国主の門に衝き立てて、すなはち墨の江の大神の荒御魂もちて、国守らす神として祭り鎮めて、還り渡りましき。

とある。後者は御杖に墨江大神の荒御魂が依りつき国土を支配するのである。先の例は、大長谷王の杖に御霊が依りつき、神そのものが支配することを都夫良意富美に告げているのであろう。

仲哀記の例と似て、雄略天皇に依りつく神霊は荒御魂で、この荒御魂が相手を制圧し、王権争いを収拾し、国土を治めることになっているのではなかろうか。

荒御魂をもつ神が、逆にその強い神霊で国土を治め豊かにする例がある。『出雲風土記』嶋根郡蝦蟇島条に、

出雲の郡、杵築の御崎に蝦蟇あり。天の羽々鷲掠り持ちて、飛び燕へり来て、この島に止まりき、故、蝦蟇島といふ。今の人、なお誤りて栲島と号くるのみ。土地豊沃えたり。

蛸をくわえてきた荒御魂の鷲神が、島に鎮座して土地を豊かにしている例である。『出雲風土記』仁多郡三沢の里条に、「御須髪八握に生ふるまで、夜昼哭きまして、み辞通はざりき」雷神阿遅須枳高日子命が、御祖の命の夢占で口をきくようになった後、巡行して止まり、「是処ぞ」と申されると、沢の水が流れ出たとある。水の流れる豊かな土地になったのである。高天原で荒ぶる神霊として神々を悩ませた須佐之男命の例も参考になろう。追放され出雲に下った須神は、その地の荒ぶる大蛇神を退治し、助けた国つ神の娘をめとり国土を治める。「八雲立つ　出雲八重垣」の歌は室寿ぎの歌であると共に、国土を治める神の国寿ぎの歌でもあろう。崇神記紀で、国内に疫病を流行させて崇った大物主神の荒御魂を、大田田根子をもって祭ったところ、『記』では「役の気ことごと息みて、国家安平らぎき」とあり、『紀』では「疫病始めて息みて、国内漸に謐りぬ。五穀既に成りて、百姓饒ひぬ」とある。このようにして、荒御魂の神霊が、逆に国土を治め豊かにする強い力を発揮するのである。(15)

安康記に記された大長谷王は、以上に類した荒御魂の神の依りつく存在であり、その神霊が触発的な激情や剛胆や強力を発揮し、仁徳系皇統のあいつぐ王権争いをまたたく間に終息させるのである。

五

問題は、こうした荒御魂の依りつく存在とみる大長谷王像が、どこで形成されてきたかである。先章で『記』『紀』『風土記』の資料を同一レベルで扱ったので、その点を含めてさらに考究しておきたい。

形成されてきたことが想定されるのは、次のようなレベルにおいてであろう。

一、村落レベル。
二、大和王権レベル。
三、『記』編者のレベル。

四、村落のものを大和王権がとり入れたレベル。
五、村落のものを『記』の編者がとり入れたレベル。
六、大和王権のものを『記』の編者が体したレベル。
七、村落のものを大和王権がとり入れるか、共感するかしていて、その王権の意志を『記』の編者が体したレベル。

の七つである。

先に、倭建命と雄略天皇とを、強力な神霊の依りつく存在とみて同一レベルで扱ったが、まったく同一とみることには問題があるかも知れない。差異があるとしても微妙で明確にしにくいと思うが、『記』『紀』によると、倭建命が国土の西東に出征し、天皇の意志を代行して大和王権を拡大した存在であり、雄略天皇が『紀』や中国・朝鮮の史書[16]や考古学上の知見から、内政外交上古代大和王権の基盤を拡大強化した偉大な存在とみられる点で、類似しているとはいえそうである。

ところで、これら二者が依りつく強力な神霊の体現者であって、その神霊が強い政治力を発揮して偉業をなしとげるという理解は、いかにも古代的な信仰観の反映である。シャーマンが神の体現者であり、依りつく神の詔言によって政治力を発揮したことと類縁しているが、違う点は倭建命も雄略天皇もシャーマンのようには思えないところにある。シャーマンは自身が神がかつて神そのものとなり、神の詔言を語ることで政治力を発揮するが、倭建命は神女倭比売命を媒介して力を発揮するし、雄略天皇は『記』の吉野の童女や金鉏岡の段で見られるように、神女との神婚により御魂を更新し、政治力を発揮する。違っているのは倭建命が聖婚していない点にあるが、いずれも神女を通して神と交霊し、力を発揮しているのである。この神信仰は、シャーマンが神がかる信仰とは違い、一歩新しいものに違いない。これは魂ふり(鎮魂)の儀礼と目されるものに属し、物部氏系統の神信仰[17]と同一とはいえないにしても、類したものと思われるので、氏族共同体の村落レベルの神信仰が大和王権に吸収されているか、同じように保持していたかするのではなかろうか。

が、ここで問題なのは、神女の媒介しない小碓命や大長谷王のときの両者である。次のように考えてみる。シャーマンになる者は、沖縄のノロになる者のような例からみても、凡人とは違う選ばれた存在である。神霊が依りつく御魂をもつ者であり、その依りつきにも強弱の差があるとみてよい。小碓命や大長谷王は自身がシャーマンになっていないが、神霊の依りつく強い御魂を保持する存在とみられているのである。それは村落レベルの古代的信仰観と通じているに違いない。

また仲哀記が記す杖に神霊の依りつく例も、『出雲風土記』や『播磨風土記』の先記した例で分かるように、この二作品が在地性の強い性質をもつ[18]から、村落レベルの古代信仰観と考えてよい。『記』はそうした信仰観を記しとどめていることになるが、村落レベルのものが、直接吸収されて、『記』の編者が記しているものではないと考える。

先に、小碓命や大長谷王の神霊付着や、雄略天皇の御魂の更新が、霊の依りつく個人の御魂の力や神女を通じてのものと記したが、そうした信仰観は、天武・持統朝の王権の神信仰観とかかわることを強く感じる。周知のように、天武天皇は壬申の乱の勝利を吉野や伊勢の神の加護と考え、乱後神信仰を重視された。乱後という

よりもともと強い神信仰観をもたれていたため、乱の勝利以前吉野に入って吉野の神に祈願し、伊勢の朝明村迹太川の辺りで、天照大神を「望拝」されたと考えるのが正しかろう。勝利後一層信仰を厚くされたのは当然で、その形跡は『紀』によって理解できる。

天武天皇の吉野行幸は、持統天皇ほど顕著ではない。しかし天武紀八年五月の吉野行幸が、その地での諸皇子との盟約にあったことは重視してよい。自己の体験した不幸な壬申の乱を顧みて、諸皇子間に争いのないよう吉野で誓いを交わされたことは、吉野の神霊を重視してのことと思われる。『万葉集』二七番歌は吉野行幸時の天皇の御製とするが、

よき人のよしとよく見てよしと言ひし吉野よく見よよき人よく見。

と歌うとき、「見る」ことの古代信仰観が生きていると思う。吉野の地の神霊との交感がそこにあり、神霊の強い発動を願って吉野を讃美したものに違いない。

天武紀六年十一月の新嘗祭も注視してよい。詳述はないが、二日後「百寮の諸の位有る人等に食賜ふ」とあり、天皇は皇祖の稲穂霊を付着する祭儀をされたものとみられる。

天武朱鳥元年六月、「天皇の病を卜ふに、草薙剣に祟れり」とある記事は、熱田社の神霊が剣に依りつき祟っていることを示すもので、杖に神霊が依りつく『風土記』の信仰観と同じである。天皇は祟りを畏怖し、剣を熱田社に返されている。

伊勢の神への信仰については、柿本人麻呂が「渡会の　斎の宮ゆ　神風に　い吹き惑わし」（2　一九九）と、壬申の乱で神の強い加護があったことを歌うが、乱後間もない天武紀二年四月、大来皇女を天照大神の斎宮にされたことが、その重視を端的に示している。神女を定め、天照大神を厚く祭ることで、日の神の霊をより強く御魂に受けることを願われたに違いない。

こうした天武天皇の理念が、持統天皇に継承されたことはいうまでもなかろう。三一回に及ぶ吉野行幸は一理由だけで説けないが、その大きな理由として、吉野の強い神霊を依りつかせ、天皇の御魂を強力にする魂振りが行われたことは確実である。[19] そしてこの信仰観は、雄略記の吉野で、天皇が吉野の神女との神婚により鎮魂の働きを受け、強力になった天皇の御魂に、蜻蛉までが奉仕する趣旨の阿岐豆野の歌謡にも通じているのである。[20]

ところで、ここに疑問が生ずる。日の神の御子であり、番能邇邇芸命の子孫で、日の神の霊と稲穂霊とを体現している天皇に、[21] なぜ殊更異境の神が依りついたり依りつかせたりする信仰観が伴うのか、という問題である。が、実はそこに、氏族共同体の族長が族祖の神霊を体現することと、天皇が神霊を体現することとの違いがある。族長は自己の共同体の神だけとかかわるが、天皇は「天の下の政」（神武記）を遂行するため、天下の地祇とかかわることのできる御魂の持主なのである。[22] だから皇祖霊以外の荒御神の神霊が、天皇と同格とみられる小碓命や大長谷王に、依りつくこともありえたのだ。多分二皇子の御魂が強いからであろう。一方大嘗祭や新嘗祭や鎮魂祭によって分かる通り、天皇の御魂は常に皇祖の神霊を付着し更新される必要があった。御魂は衰弱し昇天するからである。日の神の霊や稲穂霊を体現している天皇ではあるが、衰弱する御魂を更新し強化するため、地祇を依りつかせる鎮魂儀礼が行なわれた。その際天武・持統において、強力な神霊と考える吉野の神が選ばれ

たのである。それは壬申の乱と大きくかかわっていよう。

神の荒御魂が依りつき強力な政治力を発揮する大長谷王像は、神霊の依りつく点で村落レベルの信仰観と通じ、異境の神霊が依りつく点で天武・持統朝の信仰観と通じている。『記』の編者はその王権の理念を体して記しているのである。

注（1）『古事記を読む・4』一二二頁。8は一三一頁。

（2）『記伝』は「四度拝を重ねて再びするなり、是はたいよゝ恭敬の至にて、上代より自然然ぞありけむ後までも神を拝むには此儀あり」と記している。

（3）『古事記全注釈』第七巻下巻篇、二〇四頁。

（4）高田孝一郎「安康記の物語」（『古代研究』第2号、昭47年3月）。

（5）菅野雅雄「下巻」（『解釈と鑑賞』昭57年11月）。古典大系本解説等。

（6）「雄略記の定着」（『国学院雑誌』昭37年9月。『古事記・日本書紀Ⅱ』所収）。

（7）「雄略記の神性素描」（『上代文学』第38号、昭51年11月）。13も同じ。

（9）三省堂「新漢和中辞典」。角川書店『漢和中辞典』は〈おそれる〉〈おそれかしこむ〉をあげる。

（10）神功皇后が神がかりして神の言を告げる場面で、「ここに建内宿禰大臣白しけらく、『恐し、我が天皇、なほその大御琴阿蘇姿勢』とまをしき」とある。他例もあるが省略する。

（11）「すでにその信を行はば、還りてその情惶くあらむ。――」とある。

（12）一言主大神出現の段に、「天皇ここに惶畏みて白したまひしく、「恐し、我が大神――」。三重の采女の天語り歌の段に「――水こをろこをろに　あやに恐し　高光る　日の御子――」。

（14）これらの表現は偉人の神聖性をいう場合にも用いられ、『上宮聖徳太子伝補闕記』で太子の出生に際し、穴太部皇后は「后夢有二金色僧一」と、夢に金色の僧をみて懐妊されたとあり、『多武峯縁起』に亡くなった藤原兼足の霊を「異光時々現」「異光顕現」と記している。

（15）仁徳紀十一年条に、茨田堤築造のとき、水神に対して武蔵人強頸を犠牲にし、河内人茨田連衫子が袍を用いたうけひで堤を築く話がある。この二人に依りついている強い祖神の神霊が、水神の荒魂を制すると考えているのではなかろうか。

アイヌの昔話「七人の婿」は、依りついた荒魂が強暴な力を発揮する話であり、さらにより強い祖神の神霊を依りつかせた若者が、その荒魂の神を退治する。（萱野茂『カムイユカラと昔話』）。

（16）『宋書』倭国伝や『三国史記』百済本記に倭王武の外交の状況が記されている。

（17）松前健「宮廷鎮魂祭と石上の鎮魂呪法」（『古代伝承と宮廷祭祀』）。

（18）『出雲風土記』についてはいうまでもない。『播磨風土記』が郡により表記の違いがあり在地性の強いこと等は、拙著『古代説話の文学的研究』の論考が記した。

（19）大山厳比古「持統天皇はなぜ吉野へ行ったか」（『解釈と鑑賞』昭44年2月）、坂本信幸「山部赤人吉野讃歌の性格」（『万葉集を学ぶ』第四集）等。

（20）拙稿「雄略記の吉野」（『古事記年報』29、昭61年度）。

（21）天孫降臨後の神代記で天皇は山神霊・海神霊をも体していることになる。

（22）杉井瑞井「天皇の祭祀と大祓詞」（『高知日本文学研究』25号、昭62年12月）は、安井素彦「祓ひの哲学序論」（『神道宗教』100号）を受けて、「全国の神祇、八百万神を奉祀できるのは、天皇だけに許された御資格であり、――」と記す。